

## 韓国国立ソウル聾学校との国際交流

眞田 里佐 藤田 正樹  
韓国国立ソウル聾学校 徐 基弘

本校中学部では、韓国国立ソウル聾学校とのスカイプによる国際交流を行っている。2014年度は、1回目は自己紹介や質疑応答、2回目はお互いの学校紹介、3回目は伝統的な遊びの紹介を行った。スカイプによる3回の交流を通して、言語や文化の異なる相手に伝えるための工夫やコミュニケーション手段について考え、両国の文化やお互いの学校について知ることができた。回を重ねるごとに、生徒自身が様々な工夫をして伝え合うようになり、国や言語を越えて心と心が繋がる様子が見えがえた。本報告では、交流の目的や内容、成果と課題、そして今後の展望を報告する。

【キーワード】 国際交流 コミュニケーション スカイプ 伝え合う力

### 1 はじめに

筑波大学の附属学校 11校では、生徒の「国際的な資質」を育てることをめざし、国際教育の推進や開発途上国の教育力向上への貢献、国際交流協定などの、世界を視野に入れた教育活動が展開されている。それに基づき本校でも、国際交流への意識・意欲を高めるために各部において、国際交流の機会を設けている。中学部では、2014年度より国立ソウル聾学校（以下、ソウル聾学校）中学部とのインターネット無料通話スカイプを用いた交流学习を行っている。

### 2 韓国国立ソウル聾学校について

ソウル聾学校は、全国に5校ある国立特殊学校の一つで、2013年で創立100周年を迎えた。聾学校としては国内で最も充実した教育内容と施設・設備を誇っている。ソウル市の中心に位置し、周囲には多くの世界遺産がある。

校訓に「誠実」、「協調」、「自立」を掲げ、「愛国心」、「健全な心と身体」、「正しい言語でのコミュニケーション能力」、「社会性」、「職業意識」の育成を目標にしている。現在の幼児児童生徒数は、152名（幼稚部47名、小学部26名、中学部37名、高等部42名）である。

### 3 国際交流学習の概要

#### (1) 目的

中学部では、以下の3つの目的で国際交流学習を行った。

- ① 伝え合うための英語を含めた表現・コミュニケーション能力の向上
- ② 異なる言語や文化を学ぶと共に、日本語や日本文化を見つめ直すこと
- ③ 海外の聴覚障害中学生との交流体験

#### (2) 実践内容

##### ① 韓国についての事前学習

筑波大学大学院の留学生の協力のもと、韓国の文化や伝統的な衣食住、ハングルでの名前表記や韓国語での簡単な挨拶について学習した。（図1）



図1 留学生による韓国についての学習の様子

## ② 電子メールによる自己紹介・学校紹介

韓国語で書いた自己紹介と挨拶をソウル聾学校へ電子メールで送った。(図2) ソウル聾学校からも自己紹介と写真が届いた。また、学校行事、中学部の概要や生活について、本校生徒が制作した資料を送付し、ソウル聾学校に掲示してもらった。ソウル聾学校からは、学校行事の写真や韓国の伝統文化の映像が送られてきた。



図2 本校生徒が制作した挨拶

## ③ スカイプでの交流 (計3回)

2014年8月、12月、2015年2月の計3回、スカイプを利用して交流を行った。

## ④ 韓国の食文化体験

韓国の家庭料理である「チヂミ」と韓国の海苔巻「キムパ」を調理し、食文化を体験した。また、生徒自作によるレシピカードも作成した。(図3)



図3 韓国の家庭料理を作っている様子

## ⑤ 文化祭での展示発表

「韓国と日本」というテーマで、衣・食・住・ことばの4つのグループに分かれて展示発表を行った。また、様々な観点から見た韓国と日本の相違点を調べた。(図4)



図4 文化祭での展示発表

## ⑥ ソウルについての学習 (Facetime 利用)

本校職員がソウル聾学校を訪問した際に、ソウル市内の様子を Facetime で伝えた。(図5)



図5 Facetime でソウル市内を伝えている様子

## ⑦ 国際交流学習についての学習発表会

総合的な学習の時間で、3回の国際交流学習の内容や交流を通して学んだことについて、グループごとに分かれてまとめた。更に、学年の保護者、教員に向けて学習発表会を行った。(図6)



図6 総合的な学習の時間での学習発表会

#### 4 スカイプでの交流学习

##### (1) 1回目の交流 (2014年8月28日)

初めてのスカイプによる交流学习ということで、名前や好きなこと、趣味について紹介し、質疑応答をした。はじめはお互いに緊張した様子も見られたが、韓国語と英語で書かれたスケッチブックを提示するなどコミュニケーション方法を工夫し、表情や動きを見ながら楽しく伝え合えた。また、海外との通信ということで、通信状態が不安定になることを想定し、「待ってください」「もう一度お願いします」など、頻繁に使われることが考えられるフレーズについては、日本語と韓国語を併記した共通のコミュニケーションカードを双方で準備していた。(図7)そのため、両校の教員が日本語、韓国語、手話へと通訳をする部分もあったが、生徒同士が身振りや手話、コミュニケーションカードなどを用いて、通じ合える場面が多く見られた。ソウル聾学校の生徒が手話で、「今度一緒にサイクリングに行こう!」と話すと、本校の生徒たちが「いいね!」と盛り上がり、生徒同士で意思疎通をとる様子も見られた。(図8)

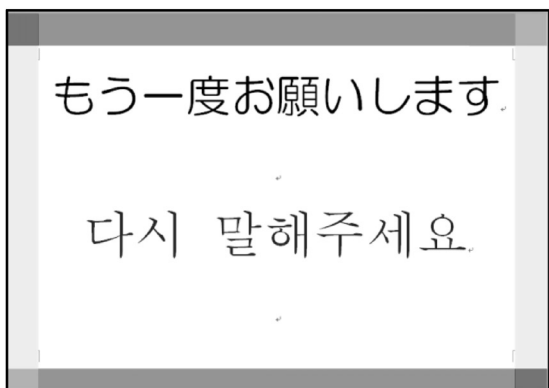


図7 コミュニケーションカードの例



図8 1回目の交流の様子

##### (2) 2回目の交流 (2014年12月15日)

お互いの学校行事を紹介した。まずは、日本の学校行事として体育祭で中学部生徒が踊ったソーラン節を紹介した。踊り方の良い例、悪い例を○×のカードで示し、ポイントの説明を韓国語で訳したものを提示しながら楽しく踊ることができた。(図9、10)

次に、ソウル聾学校の生徒が、伝統舞踊活動として、舞踏班の演技と打楽器班の演奏の様子を映像で紹介してくれた。各国の文化についての質疑応答では、無料通話アプリLINE(ライン)の翻訳チャット機能を用いた。教員が間に入ることが少なくなり、生徒同士でスムーズにやりとりを行うことができた。



図9 ソーラン節を踊る本校生徒の様子



図10 ソーラン節を踊るソウル聾学校の生徒の様子

##### (3) 3回目の交流 (2015年2月9日)

本校職員4名がソウル聾学校を訪問した際に、3回目となる交流を行った。最初に、本校中学部生徒がお土産として作ったペン立てやしおり、これまでの交流学习をまとめた掲示物を渡した。(図11)



図 11 日本の生徒が制作したものをソウル聾学校で渡す様子

その後、生徒同士の交流が始まり、まずは本校の生徒たちが日本の伝統的な遊びである折り紙を紹介した。持参した和柄の折り紙を用いて、日本の着物と韓国のチマ・チョゴリを一緒に制作した。本校生徒は、画面上のソウル聾学校の生徒の進捗を見ながら、丁寧に説明することができた。(図 12)



図 12 折り紙が完成し喜ぶソウル聾学校の生徒

次に、けん玉の紹介をした。けん玉を初めて手にしたソウル聾学校の生徒たちは、本校生徒の技の見本や説明を熱心に見聞きしながら練習をした。韓国の生徒たちも徐々にけん玉ができるようになると、教室のあちらこちらで笑顔がこぼれたり、画面の向こう側から「やったー！」という歓声が起こったりした。(図 13)



図 13 けん玉に挑戦するソウル聾学校の生徒

## 5 生徒の感想

### (1) 1回目の本校生徒の感想

- ・言葉が通じなくても、身振りなどを大きくしたら分かった。
- ・英語は世界共通語なので便利だと思った。
- ・スカイプはリアルタイムで遠くの人と話せるので良い。
- ・他の国の人ともビデオ通話をしたい。

### (2) 2回目の本校生徒の感想

- ・LINE トークでは、翻訳機能がついているのでかなり分かりやすかった。
- ・ソウル聾学校のみんなは、ソーラン節を上手に踊っていたのでびっくりした。
- ・質問をしてみたら、韓国の手話と日本の手話が似ている事が分かった。

### (3) 3回目の感想

#### ① 本校生徒

- ・交流をするほど、親しさが増した。
- ・文化が違ってても、伝えようという気持ちを持てば伝えられる。
- ・スカイプは音が伝わるし、相手の反応が分かる。

#### ② ソウル聾学校生徒

- ・お互いの文化を共有して色々と学べた。
- ・日本の友だちに会いたい。
- ・必ずまた交流して色々と聞きたい。

6 結果

(1) コミュニケーション方法について

どのようなコミュニケーション方法が役立ったか、本校生徒 14 名にアンケートを行った。1 回目の交流の後のアンケートの結果は図 14 のとおりである。

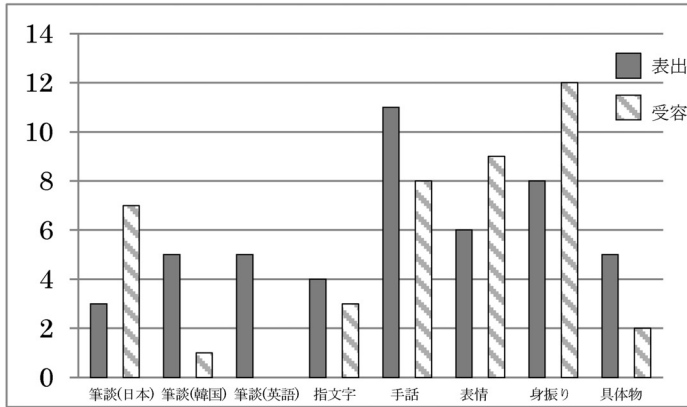


図 14 役立ったコミュニケーション方法(1回目)

1 回目の交流においては、スケッチブックに日本語、韓国語、英語などを書いてコミュニケーションをとった。表出するときに役立ったコミュニケーション方法は、「手話」、「身振り」、「表情」の順に多かった。また、「韓国語の筆談」、「英語の筆談」、「具体物」を用いたときにも相手に伝わったと感じていたことが分かった。受容するときに役立った方法は、「身振り」、「表情」、「手話」の順に多かった。スケッチブックに書いた日本語、韓国語、英語だけでなく、身振り、表情などのノンバーバルな部分から多くの情報を得ていたことが分かった。次に、LINE の翻訳チャット機能を利用して質疑応答をした 2 回目の交流の後のアンケートの結果を図 15 に示す。

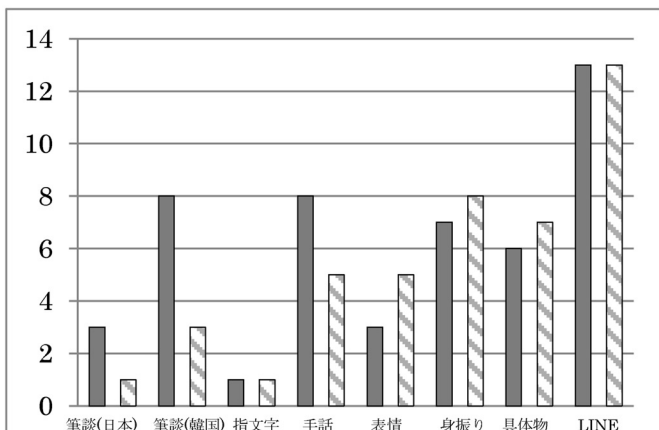


図 15 役立ったコミュニケーション方法(2回目)

2 回目の交流においては、表出するときに役立ったコミュニケーション方法は、「LINE の翻訳アプリ」、「韓国語の筆談」、「手話」の順に多かった。受容するときに役立った方法は、「LINE の翻訳アプリ」、「身振り」、「具体物」の順に多かった。表出、受容の両場面において、生徒全員が LINE の翻訳アプリを効果的だと感じていた。また、身振りや具体物など視覚的に分かりやすい形で提示することの大切さを多くの生徒が感想の中で挙げていた。

(2) 国際交流に対する意識の変化について

本校生徒 14 名と、ソウル聾学校の生徒 11 名に対して 3 回の交流が終わった後に、四段階評価のアンケートを行った。

① 本校生徒の国際交流に対する意識

「計 3 回のソウル聾学校の中学生との交流は楽しかったか」と尋ねた結果は、図 16 のとおりである。

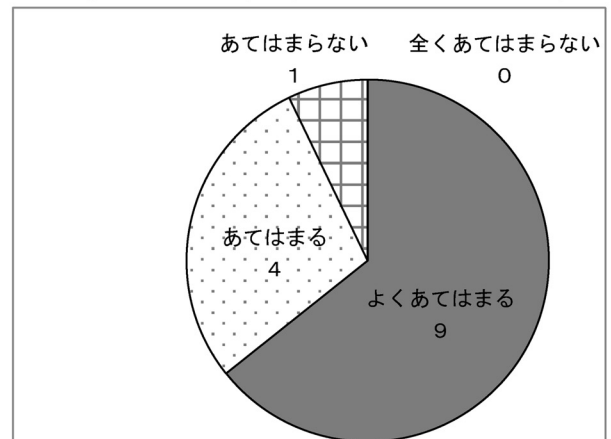


図 16 本校中学生の国際交流に対する意識

ほとんどの生徒が交流を楽しめたことが分かった。「あてはまらない」と答えた 1 名は、「あまり積極的に話すことが出来なかった」と答えていた。

自由記述では、「スカイプや LINE を利用した交流方法が分かった」「LINE を利用して交流するときに注意しなければいけない点も学習できた」「他の国の聾学校とも交流をしたい」などの記述があった。

② ソウル聾学校生徒の国際交流に対する意識

「計 3 回の日本の聾学校の中学生との交流は楽しかったか」と尋ねた結果は、図 17 のとおりである。

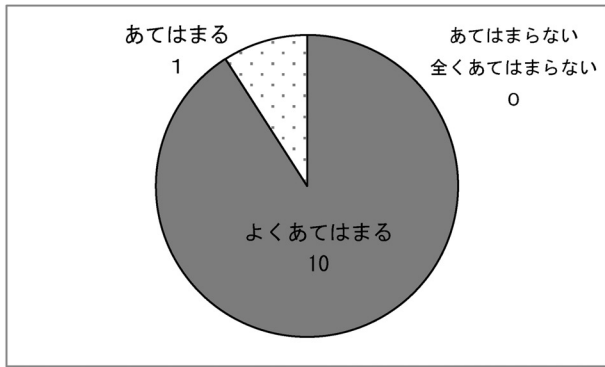


図 17 ソウル聾学校生徒の国際交流に対する意識

ソウル聾学校の13名全ての生徒が心から交流を楽しんだことが分かった。自由記述では、「日本のことや、日本の聾学校のことが分かった」「これからも交流したい」という記述が見られた。

## 7 考察

今回、ソウル聾学校との国際交流学習を行うにあたり、三つの目的を設定していた。一つ目の、「伝えるための英語を含めた表現・コミュニケーション能力の向上」に関して、交流学習を通して生徒たちは、伝えるための意欲と工夫の大切さを強く感じた様子だった。韓国語や英語を用いたり、身振りや表情を大きくしたり、写真や絵を使ったりと工夫を凝らしながら、相手に伝わる方法を考えることができた。また、生徒へのアンケートの記述から、英語だけでなく韓国語や手話など、様々な言語の必要性、相手に合わせてコミュニケーション方法を工夫することの大切さを感じたことが分かった。

二つ目の、「異なる言語や文化を学ぶと共に、日本語や日本文化を見つめ直すこと」に関して、両国の学校や文化を紹介する際には、韓国の文化を知ると共に、日本の文化や自分の学校について振り返ることができた。今回の交流を通して、日本の文化への興味が高まり、更に多くのことを他の国々に伝えたいという気持ちが芽生えたことが分かった。また、日本、韓国の交流に留まらず、世界に向けての興味・関心が芽生え、視野が広がる機会となった。

三つ目の、「海外の聴覚障害中学生との交流体験」に関しては、全ての生徒にとって、海外の中学生、しかも聴覚障害のある中学生との交流は初めての

経験だった。他の国にも聴覚障害のある生徒がいることに驚いた生徒や、思っていたよりもスムーズにコミュニケーションがとれたことで、日々の生活にも自信を持てるようになった生徒もいた。また、韓国に対するイメージが大きく変わった生徒も多く、昔からの友だちのように、「また会おうね！」と笑顔で別れを惜しむ姿が印象的だった。

## 8 今後の展望

今後の課題として、まずは、交流の継続と発展が挙げられる。国際交流を行う際には、一部の教員だけが担当をするのではなく、両校において交流を担当する教員を広げていき、継続できるような体制づくりが必要である。これに関しては、2015年6月にソウル聾学校との姉妹校交流協定を締結した。今後両校において、学校や学部の中で国際交流の仕組みを整え、積極的に交流学習を進めていきたい。

次に生徒同士の交流内容の充実が挙げられる。生徒の国際的な視野を広げると共に、自国や自分自身について見つめ直すための活動を展開する必要がある。また、両校の生徒で協同して学習ができるような企画を考えていきたい。

最後に、教員間の情報共有、交換が挙げられる。国際交流の担当教員だけでなく、各学年の教員、各教科の教員、さらに両校の教員で情報交換を行う。また、教育活動内容や情報機器等に関する情報を共有していきたい。

### 〔謝辞〕

今回の交流学習を進めるにあたり、多大なるご協力を頂いた筑波大学の鄭仁豪先生と、筑波大学大学院生の金恩河さんに心から感謝いたします。

### 〔付記〕

本研究は、平成27年(2015年)第49回全日本聾教育研究大会佐賀大会、第11分科会(国際教育・国際交流)で発表した内容に加筆したものである。

### 〔参考文献〕

眞田里佐・佐坂佳晃(2015)韓国国立ソウル聾学校訪問. 聴覚障害, 70(1), 60-65.